

東京大学大学院人文社会系研究科
次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣
帰国報告書

平成 24 年 8 月 8 日提出

派遣生の基本情報

氏名：山崎泰孝

所属先：人文社会系研究科欧米系文化研究専攻ドイツ語ドイツ文学研究室

派遣形態：PD

研究課題名：文学と生理学との交差点として読むホフマンスタール作品

派遣先での活動

(1) 派遣先の基本情報

ドイツ、ヴェルツブルク、ヴェルツブルク大学

(2) 派遣期間

出発日：2011 年 8 月 27 日

帰国日：2012 年 8 月 8 日

総日数：348 日

主な研究成果

(1) 当初の計画の概要

ヴェルツブルク大学プフォーテンハウアー教授が提示する「明証性の詩学」を自らの研究に取り入れることが当初の目的であった。具体的には、デカルト的な明晰かつ判明な明証性概念とは異なり、自明であるにもかかわらず言語化に抗する経験をホフマンスタール作品の中から読み取ることが一つ。もう一つは、そうした経験を当時の生理学のコンテクストから解釈することである。

(2) 実際に達成された成果

プフォーテンハウアー教授のもとでドクターコロキウムに参加し、2011/2012 年冬学期には「ホフマンスタール散文作品における明証性」、2012 年夏学期には「リルケ『マルテの手記』における内的ヴィジョン」という主題で研究報告を行った。冬学期の発表の準備としてこの分野の重要文献であるマンフレート・ゾマー『瞬間における明証性』を読み、反デカルト的な明証性概念の理解を深めることができた。夏学期の発表では、プフォーテンハウアー教授の研究をふまえ、生理学の言説とかがわる内的ヴィジョンの系譜として、ジャン・パウル、E. T. A. ホフマン、ゲーテ、ヨハネス・ミュラー、そしてホフマンスタールと

いう流れをまとめ、その中にリルケの散文作品『マルテの手記』における幻視を位置づけようと試みた。

(3) 今後の研究展望

19 世紀の文学、哲学、芸術に対する当時の生理学的知見の文化史的意義はすでにジョナサン・クレーリーによって明らかにされているが、今回の留学期間の中で、実際にミュラーやヘルムホルツといった 19 世紀の生理学者のテクストを読む機会が多々あったので、その経験を活かし、よりドイツ文学史に即した形で、文学と生理学との相互関係を考察してゆきたい。